

琉球王国時代の 「抱護(ポーグ)」が育む多良間島の 持続的島嶼農業システム



沖縄県多良間地域

平坦で風の影響を受けやすい多良間島では、琉球王国時代から風水思想を応用して「抱護（ポーグ）」と呼ばれる防風林を造成・維持することにより、厳しい環境での農業生産や社会生活を営んできました。そして、畜産と連携した循環型農業システムが構築され、特色ある文化や景観を生み出しています。

抱護と農業生物多様性



フクギを主林木とした抱護は、防風効果によるサトウキビの増収や、生物の生息場となるなど、農業生物多様性を保全する特徴もあります。

伝統行事の継承



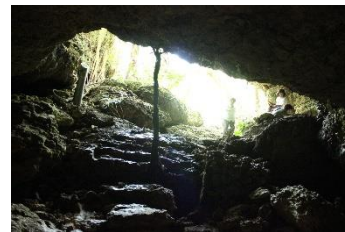
五穀豊穡や島の繁栄を祈願する伝統行事が数多く継承され、互助の精神が現在でも生き続けています。

畜産と連携した資源の活用

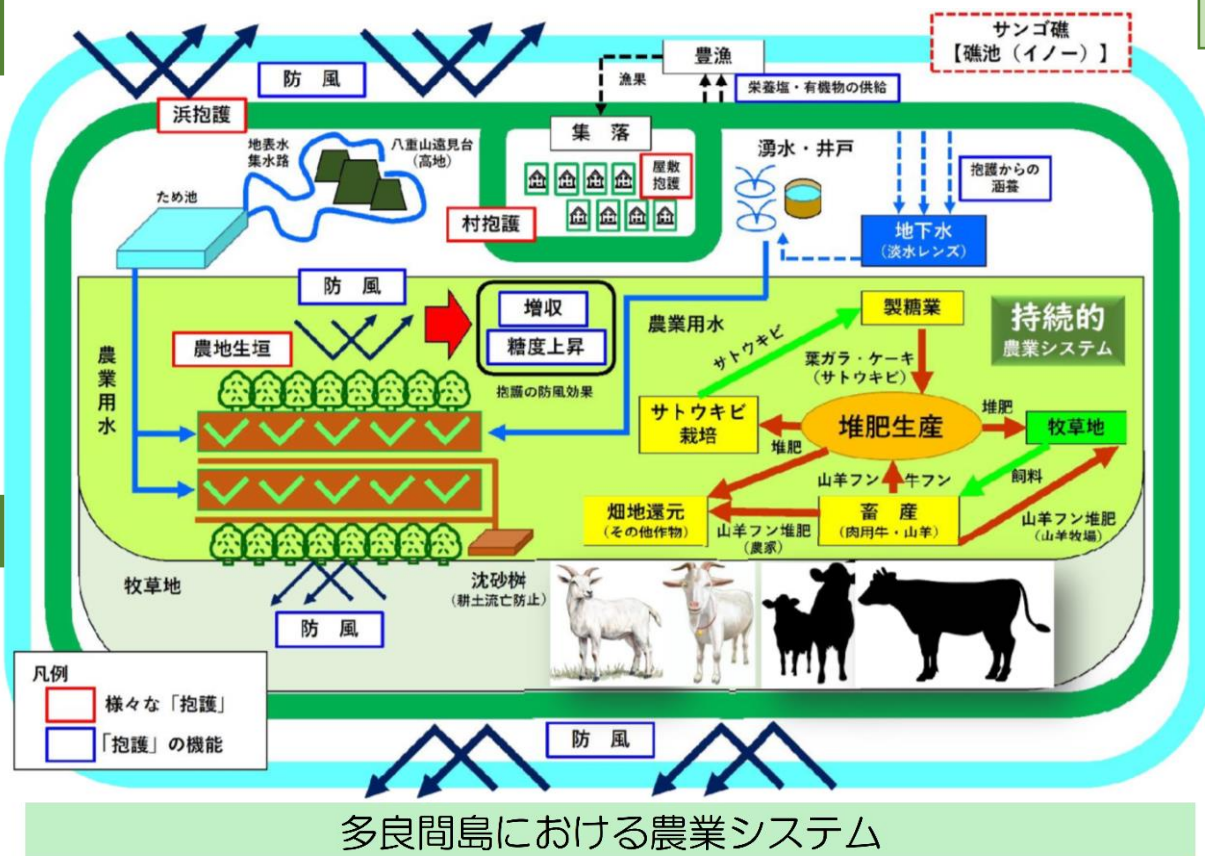


サトウキビの葉殻や牛糞、山羊糞を堆肥化して農地に還元する、持続的資源循環型農業が行われています。

水利用の取り組み



多良間島の地質は通水性が高く、雨水は速やかに地下浸透するため、ため池や地下水を貴重な水資源として、持続的に利用してきました。



日本農業遺産認定による効果

農業・畜産の振興

農業・畜産の振興

- 多良間産肉用牛やサトウキビ、黒糖などの特産品のブランド力向上

6次産業化の展開

- 「たらま黒糖」をエコ黒糖と位置づけ、ブランド化した製品開発

情報発信

- 黒糖パッケージの刷新

- サトウキビ農業生産額 25,101t、631,984千円 (R7)
- 肉用牛生産額 1,176頭、699,672千円 (R7)
- 畜産農家戸数及び飼養頭数 (R7)
牛(74戸、2,295頭)、豚(2戸、72頭)、山羊(75戸、570頭)
- エコファーマー認定 多良間地区さとうきび生産組合225戸 (R7)



さとうきび

次世代への継承

地域活性化

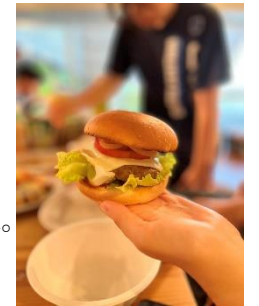
- きき黒糖大会の開催
多良間島を含む沖縄離島の黒糖を見て香って食べ比べ、お気に入りの黒糖を見つける目的。
(多良間島観光コンシェルジュ波平雄翔さん主催)



黒糖の食べ比べを楽しむ参加者

島外地域との交流活動

- 滋賀県琵琶湖地域との交流
沖縄県と滋賀県の交流連携に関する協定に基づき、視察・交流が実現。
- 農業遺産ふードコンテスト(農林水産省主催)への応募
コンテストへの応募を通して多良間島を知る生徒が増えた。
多良間村出身生徒が集う場となった。



レシピを再現し実食した生徒たち

地域の伝統的な知識

先人達から継承する農業水利の知識

- 自然洞窟の湧き水をはじめ、人工井戸、ため池など、水資源の適切で持続可能な利用

家畜による堆肥づくりと脆弱な土壌条件の改善

- 牛舎や放牧場の牛糞等を活用した堆肥づくり
- 伝統的緑肥による土づくり



たらま花染め

植物の民俗利用

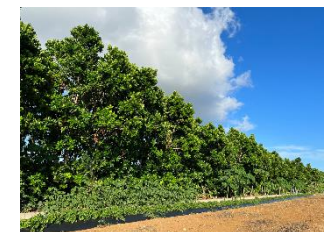
- 植物の食用、薬用、染料での利用

- 水資源: 地下水(自然井戸9か所、人工井戸29か所、淡水レンズ取水井戸20か所)
地表水(貯桝、ため池5か所・新設計画5か所)

生物多様性の推進

抱護の生態系と野生生物

- 抱護は島の自然植生から構成され、貴重種を含む様々な動植物の生息場所となり、自然災害から守る役割も果たしている。



農地防風林

豊かな海と海の幸

- 島の外周に沿って分布するテリハボク群落やアダン群落、沿岸部はサンゴ礁が発達し、優れた自然環境となっている。
- 祭事の供物のほとんどは海の幸で賄われている。



多良間島のサンゴ群落

- 村抱護の主林木: フクギ・テリハボク(高木層)、ナガミボチョウジ・リュウキュウガキ(低木層)
- 海浜域: 海岸性のアダン群落、隆起サンゴ礁植生(モンパノキ群落など)、砂浜植生
- 鳥類: アカショウビン(森林)、ヒヨドリ(街路樹)、アマサギ(農耕地)、クロサギ(海岸)
- 希少動植物: ヤシガニ(海浜)、タラマハヤシウマ(洞窟泉)、サシバ(森林)